人口問題研究（J. of Population Problems）79－2（2023. 6）pp. 172～180

研究活動報告

スペイン，オーストラリアへの長期海外出張

令和４年度，筆者（企画部第２室長・福田）は，日本学術振興会・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A））からの助成を受け，４月から７月までの３か月間をスペイン・バルセロナのバルセロナ自治大学・人口研究センター（Centre d'Estudis Demogràfics, Universitat Autònoma de Barcelona）に，８月から翌年１月までの６か月間をオーストラリア・キャンベラのオーストラリア国立大学人口学部（School of Demography, Australian National University）に滞在し，筆者が代表を務める科研費プロジェクト「両性出生モデルを用いた学歴ペア別出生力の分析：センサスデータによる大規模国際比較」（令和元～５年）に関する共同研究を行った．今回の長期研究滞在は，当初令和２年度に予定していたものであるが，コロナ禍による２年間の延期を経て，ようやく実現に至った．渡航制限が緩和された直後に行われたこともあり，特有の困難にも見舞われたが，期待以上の成果を上げることができた．以下にその活動記録を記す．

バルセロナ自治大学・人口研究センターは，ヨーロッパで有数の人口研究機関であり，所長のAlbert Esteve 教授によるリーダーシップの下，近年ヨーロッパにおけるプレゼンスを急拡大している．同センターでは，ライフコースや階層研究と人口学をリンクさせた社会人口学の研究が盛んである印象で，若手やシニア研究者を中心にヨーロッパの大型研究費も数多く獲得している．また，筆者が滞在した折には，EDSD（European Doctoral School of Demography）を同センターでホストしており，ヨーロッパの次世代の人口研究者の教育にも積極的に関与している．同センターで筆者は，所長の Esteve 教授の助言を得つつ，両性出生モデルといわれる男女両性の属性組み合わせ別出生率をモデル化して分析する手法について研究を進めた．また，アメリカ・ミネソタ大学が管理・運営するデータアーカイブである IPUMS International より世界50数か国のセンサスデータを入手し，このデータを用いて，実際に両性出生モデルを適用し，男女の学歴組み合わせ別出生力に関する予備的な分析を行った．分析結果は，オランダ・グローニンゲン大学で開催されたヨーロッパ人口学会や同センターのセミナーで報告し，フィードバックを得ることができた．ヨーロッパ人口学会は４年ぶりの対面開催ということもあり盛況であった．筆者の知る人口学者たちも健在であり，おおいに旧交を温める機会となった．とりわけマックスプランク人口研究所で切磋琢磨した同世代の研究者たちが，ドイツ連邦人口研究所（BiB）をはじめ，ヨーロッパ各地の大学・研究機関でテニュアのポジションを獲得し，研究・教育に励んでいる姿からは大いに刺激を受けた．学会では，コロナ関連の研究報告も多く見られたが，それ以外の基礎研究も着実に進められている印象を受けた．バルセロナは温暖で食べ物もおいしく，物価は他の大都市よりも控えめであり，かつ街中や周辺には多くの観光名所がある．週末は筆者も市街地や近隣都市への観光に出かけたり，センターの同僚らに日帰り旅行に誘っていただいたりと，リフレッシュすることができた．慣れないカタルーニャ語圏での生活や滞在中にコロナウィルスに感染する等，予想外のハプニングもあったが，研究に存分に集中でき，生産的な３か月間を過ごすことができた．

バルセロナから帰国して２週間後に，オーストラリア・キャンベラにあるオーストラリア国立大学（ANU）へと出発した．キャンベラはオーストラリアの首都として開発された街であり，街を南北に分けるバーリー・グリフィン湖を中心に緑や公園が多く，治安も良くて住みやすい街である．キャンベラの中心部に位置する同校はアジア・オセアニア地域を対象とした人口研究で定評があり，南半球

で随一の人口研究機関である．移民国家であるオーストラリアの社会事情を反映して，国際／国内移動や社会的統合の研究が盛んである他，近隣の人口大国であるインドネシアや中国から若手研究者を受け入れ，これらの国々を対象とした人口研究を推進している．さらには，オーストラリアを代表するパネル社会調査である HILDA（The Household, Income and Labour Dynamics in Australia）データを用いたパートナーシップや出生の研究も盛んである．当初，同校では前学部長の Edith Gray 教授との共同研究を予定していたが，ご家族のご事情等あり，筆者の着任時には学部長を退任されて研究休暇に入られた．そのため，新しく人口学部の学部長となられた Vladimir Canudas Romo 教授の助言を受けつつ，バルセロナ滞在で得られた結果やさらに精緻化した内容について研究を進めることとなった．幸いなことに，Canudas Romo 教授もマックスプランクの出身であり，直前のバルセロナ滞在中も含め，過去に幾度か話したことのある間柄であった．また，氏は数理／形式人口学のスペシャリストであり，筆者の研究で用いる両性出生モデルは氏の指導教授である Robert Schoen 教授が開発したものであったことから，筆者の研究に高い関心を寄せてくれた．氏との議論を通じて，当初予定にはなかった両性出生モデルを用いた要因分解についてのアイデアが生まれ，今後共同研究を行うこととなった．また，滞在中には ANU にてオーストラリア人口学会が開催された．こちらも 4 年ぶりの対面開催ということで盛会であった．参加者の規模としては，200名程度で日本人口学会に近いイメージである（ただし，大会参加費は日本人口学会と比べてかなり高い）．発表テーマは，日本やアメリカの人口学会と比べて，移動とアジアの人口に関するテーマの比重が大きく，コロナ関連の報告が多く見られた．また，政府統計局の職員による報告も多く見られた点が印象的であった．筆者はここでも両性出生モデルを用いた分析結果を報告し，同じセッションで報告した若手研究者と一緒に論文を書くことになる等，実り多い大会であった．オーストラリアでは，バルセロナと比べると言語の面での苦労は少なかった．しかし，記録的な円安に加え，コロナ後のインフレと家賃高騰のため，家族で渡航した筆者は経済的な面での負担が大きかった．特に，コロナ後で研究者の交流が始まったばかりであり，大学のゲストアパートメントに入居することができなかったため，短期の家具付きのアパートメントを探すのに苦労した．またラーメン一杯に2500円近くしたのには閉口させられた．いろいろありながらも，なんとか家族共々無事に半年間の研究滞在を終えて帰国することができたのは，ひとえに公私に渡り生活をサポートしてくれた Canudas Romo 教授はじめ ANU の職員，そして現地で知り合いとなった日本人の方々のサポートのおかげである．記して感謝申し上げたい．

久しぶりの海外渡航及び長期滞在となったが，どちらの滞在においても新しい出会いがあり，新たなアイデアや気づきを得て，新しい共同研究をスタートすることができた．異国での生活には苦労も多いが，やはり研究はじかに人と接することにより得られるメリットが大きい．今回の研究滞在で得た経験を活かし，研究成果をまとめていきたい．最後に，今回長期の海外出張を認めていただいた研究所幹部，研究費のスムーズな執行をサポートしていただいた事務方，そして筆者が不在の間，プロジェクトリーダーを務めてくれた佐藤室長には改めて感謝申し上げたい．　　（福田節也　記）

オックスフォード大学における web 講演

2022年10月24日英国オックスフォード大学にて「Sensitivity analysis of Japan's population decline based on intergenerational migration history」というタイトルで web 講演を行った．この講演は北海道大学名誉教授高田壮則先生の計らいにより，オックスフォード大学 Rob Salguero-Gómez 教授を紹介して頂く形で実現した．同教授は数理生物学，生態学と幅広いテーマに取り組んでおり，特に先述の高田先生と複数の同僚と共に動植物の個体群動態に関する行列モデルのデータベー